

牧野富太郎

津田青楓園

春の七草(六)

ホトケノザ(三)

私はこのムラサキ科のものを絶対にタビラコと認めぬ故に、新たにこれにせタビラコの新称を与えておいたが、その後それにキウリグサの名があることを知った。

これはその生の葉をもめばキウリ(胡瓜)の香がするからである。また今日世人が呼ぶ唇形科のホトケノザを試みに煮て食って見たまえ。うまくないものの代表者はまさにこの草であるということがわかる。しかし強いてたえて食えば食えないことはなからうが、まあ御免ごうむるべきだろう。しかるに貝原の「大和本草」に「腹民版ニ加へ食フ」と書いてあるが怪しいものだ。こんな不味いものを好んで食わなくても外に幾らも味の良い野草がそこにサラにあるではないか。貝原先生もこれを「正月八日七草ノ一ナリ」と書いてい



品のものはこれをカスミグサと通称するようになったらいいと思う。

このカスミグサの名は江戸の俗稱でこの草が春霞の棚引く頃に咲き出するからそう呼ぶのだとの事である。然し尚その他にホトケノツツレトニヒグサ、カザグルマ、サニガイグサ、シイベログサの数名がある。前記したタビラコの稲穂菜は支那でも野人がこれを食する事が「植物名実図考」に見えていて「蜀人茹之」だの「吾蜀人喜食之」だのの語が記してある。

要するに春の七草として今世間一般にいつている唇形科のホトケノザを用うるは極めて非では誤認の甚だしいものである。たとえ小野蘭山がそうだと謂っていてもそれは決して正鵠を得たものではない。七種のホトケノザはキク科植物の一なるタビラコの古名である。このタビラコは飯沼慈舟の「草本図説」に「オニタビラコ」と

あるが、これもまた間違いである。そうかと思つと同書タビラコの条に「本邦人日七草ノ菜ノ内仏ノ座是ナリ、四五月黄花開ク、民俗版ニ加へ繁食ス又アヘモノトス味美シ無毒」と書いてあって自家衝突が生じているが、然しこの第一二の方が正説である。

同書には更に「一説ニ仏ノ座ハ田平子也」ノ葉蘊華ニ似テ仏ノ座ノ如シ」ノ葉冬ヨリ生ズ」の文があつてタビラコとホトケノザとが同物であると肯定せられてある。そしてこの正説があるにかかわらず更に唇形科の仏の座を春の七草の一だとしてあるのを見ると貝原先生もちとまごついた所があることが看取せられる。唇形科品のものホトケノザといふ時はタビラコをホトケノザと混淆しつゝなる不便を感じる。それ故右の唇形科

してその図が出ている。前にもいつたようにこれは支那の稻穂菜でその図が「植物名実図考」にある即ち日本ではタビラコ、支那では稻穂菜である。人によりケンゲバナ(レンゲソウはこの植物本来の名ではない)をホトケノザと称すれどこれは非である。タビラコの名はキク科のものが本場でムラサキ科の品にせものである。このにせものをタビラコの本物と吹聴したのもまた蘭山である。蘭山は實にこの二つの誤謬を敢てしている。

スズナ
カブ即ち蕪菁を七種に用うる時の特稱。
スズシロ
ダイコン即ち蘿蔔を七種に用うる時の特稱。